

職員一人ひとりが広報担当！ 「むろけんRUN」 —地域の方々に室蘭開発建設部の姿を 知っていただくために—

室蘭開発建設部 広報官付 ○山内 靖子
野口 大介
櫻庭 尚身

室蘭開発建設部では、平成26年10月から、地域の方々に当部の事業や取組を発信し、当部がどんな組織であり、どんな人が、どんな仕事をしているのか、そして地域とどんな関わりを持っているかを知っていただくとともに、職員のモチベーション向上を図ることを目的とする広報の取組「むろけんRUN」を推進している。本稿は、「むろけんRUN」の具体的な取組について紹介するとともに、本取組の効果について考察するものである。

キーワード：戦略的広報、広報広聴意識、組織運営の活性化

1. はじめに

室蘭開発建設部（以下「当部」という。）が存する室蘭市には、国土交通省の地方機関だけでも室蘭運輸支局、室蘭海上保安部、室蘭地方気象台があるほか、北海道の胆振総合振興局には室蘭建設管理部という名称の組織がある。

このように様々な行政機関がある中、地域の方々に、当部がどのような組織で、どのような仕事をしているのか、正しく知られているだろうか。私たちが事業を進めていく上で、地域との連携が不可欠であり、そのためには地域の方々に私たちのことを知ってもらい、理解され、そして信頼されることが何よりも必要なのではないかと。

このような認識の下、当部では、平成26年10月から、地域の方々に当部を知ってもらうための広報の取組「むろけんRUN」（以下「本取組」という。）を進めている。

2. 「むろけんRUN」とは

「むろけんRUN」とは、当部独自の広報の取組である。

では、当部（あるいは北海道開発局）が広報広聴活動を行う目的とは何か。それは、第1に、国民・道民の安全・安心な生活を維持し、北海道の社会・経済の発展を通じて我が国全体の課題解決に貢献するという社会的使

命の達成のため、施策、事業、災害対応及び地域への支援等について分かりやすく発信し、社会資本整備の意義や効果、地域づくりの取組について国民の理解を得ること、第2に、国民や地域の意見・要望を把握し、施策・事業等や業務運営に反映させ、これらの質と効果を高めること¹⁾にある。

この目的を達成するため、職員一人ひとりが広報担当であるという自覚を持ち、各部門が連携した広報広聴活動を行うことによって、職員が丸となって国民・地域住民との信頼関係の構築に継続的に取り組むこととしている。

(1) むろけん3つの姿

人口減少、高齢化、多発する自然災害など、地域が抱える課題が様々に増えていく中で、当部がその役割を果たしていくためには、地域との連携が不可欠であり、地域の方々に当部がどのような組織で、どのような人が、どのような仕事を担っているのか、地域とどのような関わりを持っているかなどを知っていただく必要があると考える。そこで、これらを分かりやすい内容で発信するため、当部の役割や活動等を、①「生活に不可欠な社会資本を整備するプロ組織」、②「災害時にいち早く駆けつけて働く組織」、③「国の出先機関として、国、自治体、民間団体等との幅広いネットワークを持つ組織」に分類し、地域の元気や地域の安全のために働く3つの姿を持つ組織であることを戦略的に広報することとした（次頁図-1）。



図-1 むろけんの3つの姿

(2) ロゴマーク

本取組を積極的かつ効果的に進めるため、取組の「顔」となるロゴマークを作成することとした。地域の方々から当部をより身近に感じていただくため、さらには、職員の広報広聴意識を高め、日頃から「むろけんRUN」の取組を意識して業務に取り組んでもらうため、視覚的にイメージしやすいシンボリックなものを作ることとして、当部職員に公募した。

応募規定は、「むろけんRUN」をイメージできるものとして、簡単明瞭なカラー表現で一色でも表現できるものであり、かつ、縦横の比率が概ね同じものとした。

約1か月間の応募を行ったところ11件の応募があり、それぞれ当部や地域への思いが感じられる作品であった。応募作品について審査した結果、「むろけんRUN」を一目でイメージできる図-2の作品に決定した。このロゴマークは、一番上はヘルメット、中段は駆け足、一番下



図-2 ロゴマーク



図-3 職員の名刺

は胆振・日高管内を表す図形を組み合わせたもので、社会資本の整備や災害発生時など、職員が胆振・日高管内を駆け巡る姿をイメージしている。

ホームページや広報誌「むろけんRUN」、報道提供資料の表紙、職員の名刺(任意)(図-3)のほか、管内事業概要などで活用している。さらには、地域の方々との様々な関わりにおいて、このロゴマークを活用していくことによって、「生活に不可欠な社会資本を整備する」や「災害時にいち早く駆けつけて働く」といった当部の役割を職員が再認識するとともに、外に向かって本取組を積極的に発信していくことを期待するものである。

3. 「むろけんRUN」の具体的な取組例

具体的な取組として、以下(1)から(4)の4つを柱として取り組んでいる。

(1) 広報誌による発信

本取組の名称の由来ともなっている、広報誌「むろけんRUN」は当部の事業を紹介する広報誌として、平成21年10月に第1号を発行して以来、これまで全26号(平成27年12月9日現在、号外含む)を発行している。発刊当時は、外部向け事業広報誌として位置付けられ、事業内容や効果等、事業に焦点を当てた構成としていたが、平成25年2月に編集方針が見直され、事業だけではなく現場で職員が活躍する姿も積極的に広報していくこととなった。この見直し後の編集方針は本取組の原型であり、平成26年10月に本取組がスタートするに当たって、スムーズに進めることができた。

本取組の趣旨を踏まえ、当部の事業等の紹介、地域との関わりに加え、職員が大きく映っている写真や職員のコメント等を掲載して「人」に焦点を当てた構成(次頁図-4)とし、「おもて面で手に取らせ、うら面で読ませる」という作りに磨きをかけることとした。

社会資本整備や事業といった言葉を聞くと、どこか無機質な印象を受けがちである。しかし、そこに「人」



図4 広報誌「むろけんRUN」vol.21

の存在が加わることで、当部が管内の様々な地域で実施している事業には、職員の熱意（汗と涙）があることを伝え、そのことによって、掲載されている内容に親しみとメッセージ性を持たせることができるものと考えている。

(2) ホームページを活用した発信

a) トップページフラッシュ動画

当部ホームページのトップページには、複数枚の写真をスライド表示するフラッシュ動画を上半分のスペースを使い大きく掲載している（図5）。これは、トップページを見た方に、当部の事業や職員が活動している姿を一目で理解していただくことを狙った取組である。

写真10枚を使い、1枚当たり4.5秒の表示とし、2か月ごとに更新している。このことによって、ホームページに新鮮な印象を与え、フラッシュ動画を最後まで見てもらえるよう工夫した。

掲載する写真は、各事務所等で選任した活動記録担当者から4半期ごとに報告してもらおう職員の活動状況写真や広報係で取材した写真の中から、日ごろ、職員が担当



図5 HPトップページ



図6 写真の加工

する現場でどのような活動を行っているのか、自然体の仕事ぶりが一目で感じられるような写真を選定している。選定した写真はトリミングして無駄な部分を無くし、見せたい部分が強調されるように加工している（図6）。写真をどのように見せたいのか、そのためにはどのように加工するかを考え、写っている職員や事業がより強調され、見る人にとって少しでもインパクトのある写真となるように心掛けている。

b) コンテンツ「むろけんの現場から」

「むろけんの現場から」は、当部の活動状況を、①「工事・維持管理」、②「災害・防災」、③「見学会、パネル展など」の3つのジャンルに区分し、概略等のほか写真を3枚程度載せて紹介しているページである。写真は現場の様々な場面・角度から撮影し、可能な限り職員が活動する姿が写っているものを選び、トリミング等の加工をして掲載している。ホームページを見た方に、事業だけではなくその現場の中に、「人」つまり職員の存在を感じてもらえるようなページ作りを行うよう心掛けている（図7）。

さらに、「活動アルバム」というページを設け、トップページのフラッシュ動画で使用した写真をまとめて掲載した（次頁図8）。これはフラッシュ動画に使用した写真のアルバム化である。フラッシュ動画は、現在進行



図7 HPむろけんの現場から



図-8 HP活動アルバム



図-9 HPけんせつの現場から

形でその時々々の事業と職員の活動状況をテンポ良くタイムリーで紹介する役割を担い、「活動アルバム」は、各年度における職員の活動状況をアーカイブ化し、記録写真として紹介する役割を担うものである。

平成26年度は50枚、平成27年度（平成27年10月22日現在）は29枚の写真を掲載している。写真の下にはコメント（概要、日付、課所名）を記載して職員の活動状況を分かりやすく紹介し、また、写真をクリックすると大きな写真が開くよう工夫した。

c) コンテンツ「けんせつの現場から」

「けんせつの現場から」は、建設産業において、災害対応で活躍した方や、女性、若者といった「人」に焦点を当て、仕事上での抱負や活躍などをインタビュー形式で紹介し、建設産業の現場を応援するページである。これは建設産業の役割や価値について理解促進を図り、魅力の向上と活性化へと繋げていくことを狙ったものであり、北海道開発局で初の試みである（図-9）。

このような試みを企画した背景は2つある。1つ目は、建設産業は社会資本の整備・維持を担い、災害時には初動対応から応急・復旧作業に至るまで、現場の最前線で重要な役割を果たしてきた、いうなれば、地域社会の安全・安心を支える「国土の守り手」であること、2つ目は、当部が社会資本の整備や災害対応などを通じて、国土を守り地域の発展に寄与していくという社会的使命を達成するためには、カウンターパートたる建設産業の力が必要であり、連携を図りながら各種施策に取り組んでいく必要があること、である。

インタビューに当たっては、現場での活躍だけではなく、仕事に対する熱意、やりがい、苦勞していることなど、生の声を聞き取ることに心掛け、紹介者の人柄、例えば、災害の現場で頑張る人たちの意気込み、男性が多い社会の中で颯爽と輝きながら活躍する女性の姿、仕事

に対する若者らしい情熱などを紹介し、建設産業の魅力が感じられるような紙面作りを行っている。

紹介者には、平成26年度は6名（災害対応2名、女性の活躍2名、若者の活躍2名）、平成27年度（平成27年12月2日現在）は3名と1団体（災害対応1名、女性の活躍1名、若者の活躍1名と1団体）の方にインタビューを行い、今後も随時更新していく予定である。

(3) 外部機関との様々な機会を活用した発信

外部への情報発信、意思疎通の機会としては、報道機関による取材、自治体や関係団体との意見交換会等がある。

国民・地域住民の多くはテレビや新聞等の報道機関から情報を得、影響を受ける。そのため、この報道機関が持つ影響力・伝播力を活用して情報発信していくことはとても効果的で重要である²⁾。事業等に関する取材は、報道機関を通じて広く効果的に広報することができる絶好の機会として捉え、誠意を持って対応するとともに、信頼関係の構築に努めている。

また、自治体や関係団体とは、地域の問題を共有し、意見交換会等を通じて当部が進める事業について理解・協力を頂けるよう努めている。

(4) 出前講座等のツールを活用した発信

上記(1)から(3)のほか、出前講座、現場見学会、講習会、各種パネル展などを活用して情報発信している。これらは、当部が行っている事業について、直接的に地域の方々に説明でき、また、様々なご意見など生の声を聞かせていただくことができる機会でもある（次頁図-10）。

出前講座の実施状況は、平成26年度は4件、平成27年度は6件（平成27年12月1日現在）であり、平成27年度の



図-10 樽前山の火山噴火対策に関する出前講座を現地にて開催 (H27.8)

実施済み6件の内、3件は管外からの申込みであった。参加者には出前講座の内容及び当部の認知度に関するアンケートをお願いしており、事業に関しては、「国としての大規模長期的事業に気づくことができた」、「減災に関わる様々な取組を知ることができた」、「必ず役に立つ事業だと思うので完成後も見に行きたい」、職員に関しては、「とても分かりやすい説明で勉強になった」、「(説明や対応が)とても親切」など、多数のご意見やご感想を頂いている。このことは、出前講座が当部の事業と職員の誠意ある姿を身近に感じていただき、かつ、直接的に情報発信することができるツールとしても十分機能していることを示している。

また、広報係では、出前講座等で実施したアンケートを集計して、グラフ等により見える化を図り参加者の生の声を添えて、Garoon広報官掲示板において職員へ周知している。上記のような意見は職員のモチベーション向上にも寄与するものと考えられる。

4. 報道発表とマスコミ各社の報道状況

本取組に関しては、平成26年10月30日室蘭民報の室蘭開発建設部事業特集において、「むろけんRUN」の名称が初めて紙面で紹介された。当部としては、平成27年1月20日にホームページ「現場から」のリニューアルについて報道発表を行い、その中でトップページリニューアル、「むろけんRUN」の取組、ロゴマークについて紹介した。報道発表後、各報道機関によって本取組について報道がなされ、平成27年3月5日には北海道新聞(全道版)のトピックス的なコーナー「こだま」において、ロゴマークが初めて紙面で紹介された。最終的に、10紙面(一般紙8紙面、専門紙2紙面)で掲載され、内容はホームページ「現場から」が一番多く、次いで「むろけんRUN」の取組であった(表-1)。

記事にはホームページの画面を大きく掲載して紹介されており、コンテンツ「現場から」については、「昼夜

表-1 「むろけんRUN」の取組に関する報道状況

| 月日 | 新聞社名 | タイトル、特集名 | 掲載された内容 | | | | | | | | |
|-----------|-----------|---|------------|----------|----------|------------|-------|----|----|-----|----|
| | | | むろけんRUNの取組 | HP「現場から」 | HPリニューアル | HPトップページ画像 | ロゴマーク | 計 | | | |
| H26.10.30 | 室蘭民報(朝) | 室蘭開発建設部事業特集(部長インタビュー及び事業紹介) | ○ | | | | | 1 | | | |
| H27.1.20 | | ～HP「現場から」のリニューアルについて報道発表(トップページリニューアル、むろけんRUNの取組、ロゴマークについても言及)～ | | | | | | | | | |
| H27.1.22 | 速新(朝) 室蘭 | 建設業の魅力ネットで紹介 | | ○ | | | | 1 | | | |
| H27.1.23 | 速新(夕) 苫小牧 | 建設業の魅力HPで紹介 室蘭開建が新コーナー | | ○ | | | | 1 | | | |
| H27.1.25 | 日高報知 | けんせつ現場から室蘭開建がHP作成 | | ○ | | | | 1 | | | |
| H27.1.28 | 速通 | ホームページをリニューアル 現場の声を届ける「けんせつ現場から」開設 | ○ | ○ | ○ | | | 3 | | | |
| H27.2.2 | 苫小牧民報 | 建設業で働く人を紹介 ウェブサイト「現場から」リニューアル | | ○ | | | | 1 | | | |
| H27.2.4 | 室蘭民報(夕) | 室蘭開発建設部むろけんRUN HPリニューアル | ○ | ○ | ○ | | ○ | 4 | | | |
| H27.2.11 | 建設新聞 | 室蘭開建がHP内に新コーナー「けんせつ現場から」管内で働く6人を紹介 | ○ | ○ | ○ | ○ | | 4 | | | |
| H27.2.18 | 室蘭民報(朝) | 室蘭2015「トップに聞く」 | ○ | | ○ | | | 2 | | | |
| H27.3.5 | 速新(朝) 全道版 | こだま(トピックス的なコーナー) | ○ | | | | ○ | 2 | | | |
| | | | 記事数 | 一般紙 | 8紙面 | 4 | 5 | 2 | 0 | 2 | 13 |
| | | | 専門紙 | 2紙面 | | 2 | 2 | 2 | 1 | 0 | 7 |
| | | | 計 | 10紙面 | 6回 | 7回 | 4回 | 1回 | 2回 | 20回 | |



図-11 室蘭民報の記事(平成27年2月4日 夕刊)

を問わず災害現場に駆け付けて道路や航路啓開…に取り組む姿や市民生活を支えする取り組みなどを写真で紹介」、ロゴマークについては「職員たちが士気を高め、現場を走り回ってほしいという願いが込められている」や「親しみやすさが増している」など、新聞を読んだ人が当部がいざというときに頼りになる身近な存在であると感じてもらえるような表現で報道された(図-11)。

単に「取り組む」ことにとどまらず、積極的に報道発表したことによって多くの報道機関に取り上げてもらい、今まで当部に馴染みのなかった方々にも知ってもらう機会となったと考えている。

5. まとめ

(1) 取組の効果

これまで述べたことを総括すると次のとおりとなる。

「むろけんRUN」とは、①当部の姿を知ってもらうための取組であること、②取組を進めるに当たっては、職員が活躍する姿を中心に据えた戦略的な広報活動を進めていること、③これらの活動を通じて、国民や関係機関、そして何よりも地域の方々との信頼関係を深め、当部の役割や施策に対する理解の促進を図り、社会的使命の達成を図るための取組であるということである。

そして、本取組のポイントは、その主体がいずれにおいても「人」つまり「職員」ということである。「むろけんRUN」という旗印の下、「地域のためにこんな仕事をしています」や「地域に役立つ取組を進めています」など、職員一人ひとりが、私たちの仕事・働きを知ってもらいたいという気持ちを持って日々の業務に取り組んでいくことが、組織全体の広報広聴意識の向上に繋がり、さらに前述のツールで、戦略的に広報していくことによって、今よりも地域の方々に理解、信頼され、必要とされる組織となっていけるものと考えている。

これらのことは何ら新しい発見ではなく、いつかどこかで誰かが語ったこと、職員の誰もが思っていることだと思われる。しかしながら、誰もが何となく思っていたことを意識し、シンボリックな名称を付け、体系化して広報活動を展開した例は少ないと考える。このような取組を通じて、職員のモチベーション向上を図り、さらには組織運営の活性化も図ろうとする試みは、北海道開発局コンプライアンス推進計画に掲げる「社会的使命の達成に向けた組織運営の活性化の取組」にも合致するものである。

地域の方々が私たちを理解し、その仕事ぶりや成果を評価してくれれば、とても喜ばしいことであり、この喜びが充実感や意欲の向上として、各職員の仕事ぶりにも反映され、プラスのスパイラルとなって組織全体へと広がり、組織運営の活性化に繋がるよう、「むろけんRUN」の取組を継続していきたい。

(2) 今後に向けた課題等

一方で、本取組を進めていく上での課題も見えてきた。

ホームページ「けんせつの現場から」の災害対応のコーナーについては、もう少し幅広い考え方で紹介しなければ、継続的な更新は難しい。女性の活躍のコーナーについても、胆振・日高管内の建設業界の現場で働く女性職員はまだまだ少ない現状にあるため、当部としてもアンテナを高くし、広い考え方で紹介者を探していきたい。

出前講座等で実施しているアンケート調査については、

幅広く地域の方々の声を聞くために、各事業部門の協力を得て、各種イベントや現場見学会等、実施する機会を増やしていく必要があると考える。また、集計したアンケート結果については、部内報においてイベント等の開催の様子と合わせて紹介していくなど、広報官掲示板への掲載のほかにも、職員へフィードバックする方法を検討する必要があると考える。

さらに、上記の課題とは別に、本取組をより効果的に進めていくため、災害発生時においては、前述の活動記録担当者から提供された災害状況や職員の活動状況を記録した写真を使って、災害時の活動状況等を効果的に発信していく必要があると考える。

6. おわりに

平成26年10月に本取組が始まってから1年が過ぎた。ロゴマークは当初考えていた活用方法以外にも、防災対策官が作成する防災ポケットブックの表紙に表示するなど、少しずつその活用の幅を広げている。そして、地域振興対策室が職員の活動する姿が写った写真を使って「2016むろけんRUNカレンダー」を作成するという試みも行っている。また、ホームページのトップページのフラッシュ動画に掲載された職員の姿を家族（子供）が見て、喜んでいたという声も聞く。

とはいえ、まだまだスタートしたばかりであり、課題もある。広報に関する書籍に「広報はマラソンのようなもの」³⁾と書かれていたとおりで、1~2年取り組んだからといって、その成果が出るわけではなく、継続していくことが大切である。今後も、職員一人ひとりが広報担当という意識を持ち、日々の業務の中で持続的に取り組んでいきたい。そして、遠くない未来、「私は『むろけん』の職員です」と言ったときに、地域の方々にむろけんの3つの姿を思い浮かべてもらえるように。

謝辞：本論文を作成するに当たり、株式会社室蘭民報社には、記事の使用に関する承諾を頂いた。御協力いただいた皆様に、この場を借りて謝意を表したい。

参考文献

- 1) 平成27年3月16日北海道開発局広報広聴委員会：北海道開発局広報広聴活動に関する基本方針
- 2) 社団法人 建設広報協議会：役に立つ広報の話
- 3) 荷堂淳：広報を面白くするための十三章